

Echoes of Time

景色が受け継ぐ能代

17～20ページは、能代市市制20周年記念事業の一環で実施する
秋田公立美術大学と能代市の連携による特集ページです。

vol. 02

December, 2025

現実と理想を結ぶ

被写体は龍泉寺に安置されている御沢仏（おさわぶつ）。御沢仏とは、かつて山形県湯殿山で行われていた「御沢駆け」という修行の場であった沢の岩や滝などを仏や神と見なしたものである。仏像群は現在、全国でも数例しか確認されていない珍しいもので、龍泉寺には約50体が安置されている。今回、特別に許可をいただき、そのうちの2体を撮影した。（撮影場所：龍泉寺）





現実理想を重ねた 「どこにもない」理想郷

「Echoes of Time」が掲げる「写真の力で、新たな魅力を創造する」という考えは、仏像が写真というメディアに出会った最初期から実践されてきたテーマともいえます。戦後日本を代表する写真家・土門拳が仏像をライフワークとして撮影し続けたことは有名ですが、それ以前、明治期に活躍した小川一真も、文化財の記録調査に同行しつつ、単なる記録写真を超えた作品を残しています。彼が撮影した仏像写真には、上半身のクローズアップや背景の消去といった、撮影者の個性が発揮されたものが多く含まれます。

今月号に掲載された2枚の写真にも、暗闇に浮かぶ顔のアップや背景を切り取る手法など、先達たちと共通したアプローチが認められます。加えて、草彌さんは土門の作品を意識し、肉眼では見ることでできない

世界を捉えるためにマクロレンズを用いた撮影を行っています。

マクロレンズによるその表現は、18・19ページの見開きの写真でいかなく発揮されています。実は、この仏像の本体は高さ50cmにも満たない小さなものなのです。実物を前にしても、(少なくとも私には)目は閉じているようにしか見えず、半眼であることすら認識できませんでした。

マクロレンズが捉えたのは、精緻な眼の造り、陰影によって浮かび上がるわずかな凹凸、そして時間の経過を物語る顔料のひび割れでした。それらが一体となって醸し出す、半眼で瞑想する静かな表情に、深い畏敬の念を抱かずにはいられません。御沢仏像には、明治政府の神仏分離政策で混乱した湯殿山信仰を復興させたいという切実な思いが込められていたといえます。草彌さんが引き出したこの丁寧な造形や質感に、制作者の強い願いが宿っているように

感じられます。

もう一体の像は、古代中国の神仙思想に由来する理想郷「蓬莱山(ほうらいさん)」を表現したものと考えられています。この蓬莱山は、松、鶴、鹿といった理想郷の象徴に埋め尽くされています。そして、背景を消去した写真は、この場所が「どこにもない」ことを強く印象付けます。

実在の岩や滝を対象とする他の仏像群の中に、なぜ理想郷である蓬莱山が加えられたのでしょうか。残念ながらその答えは明らかになっていません。しかし、この現実の風景と理想郷とを彫刻によって結びつけようとした壮大な構想力に、強く心惹かれます。

龍泉寺の御沢仏像は、文化財としての本格的な調査が待たれている状況とのことです。調査によって様々な事実が明らかになる日を心待ちにしつつ、それまでの間、写真が創造した仏像の新たな魅力を通して自由

に想像を巡らせることも、文化財との豊かな付き合い方の一つではないでしょうか。

【参考文献】

◎碧海寿広『仏像と日本人―宗教と美の近現代』中央公論新社、2018年

◎岡田靖他『湯殿山信仰に関する御沢駆け行と御沢仏について』「複合的保存修復活動による地域文化遺産保存と地域文化力の向上システムの研究」研究成果報告書、2015年
◎岡塚章子『小川一真の「近畿宝物調査写真」について』東京都写真美術館紀要(2)、2000年

Echoes of Time

(エコーズ・オブ・タイム)

景色が受け継ぐ能代

vol.02 | December, 2025

写真 草彌 裕
執筆 井上宗則
デザイン 越後谷洋徳
編集 高橋ともみ
企画 秋田公立美術大学
制作 NPO法人アーツセンターあきた

能代市市制20周年記念事業業務委託